

北海道101総合アピール

NO.

1

北海道101総合アピール視点

北海道—その幻想の地図

資料 引用文

ロケハンレポート

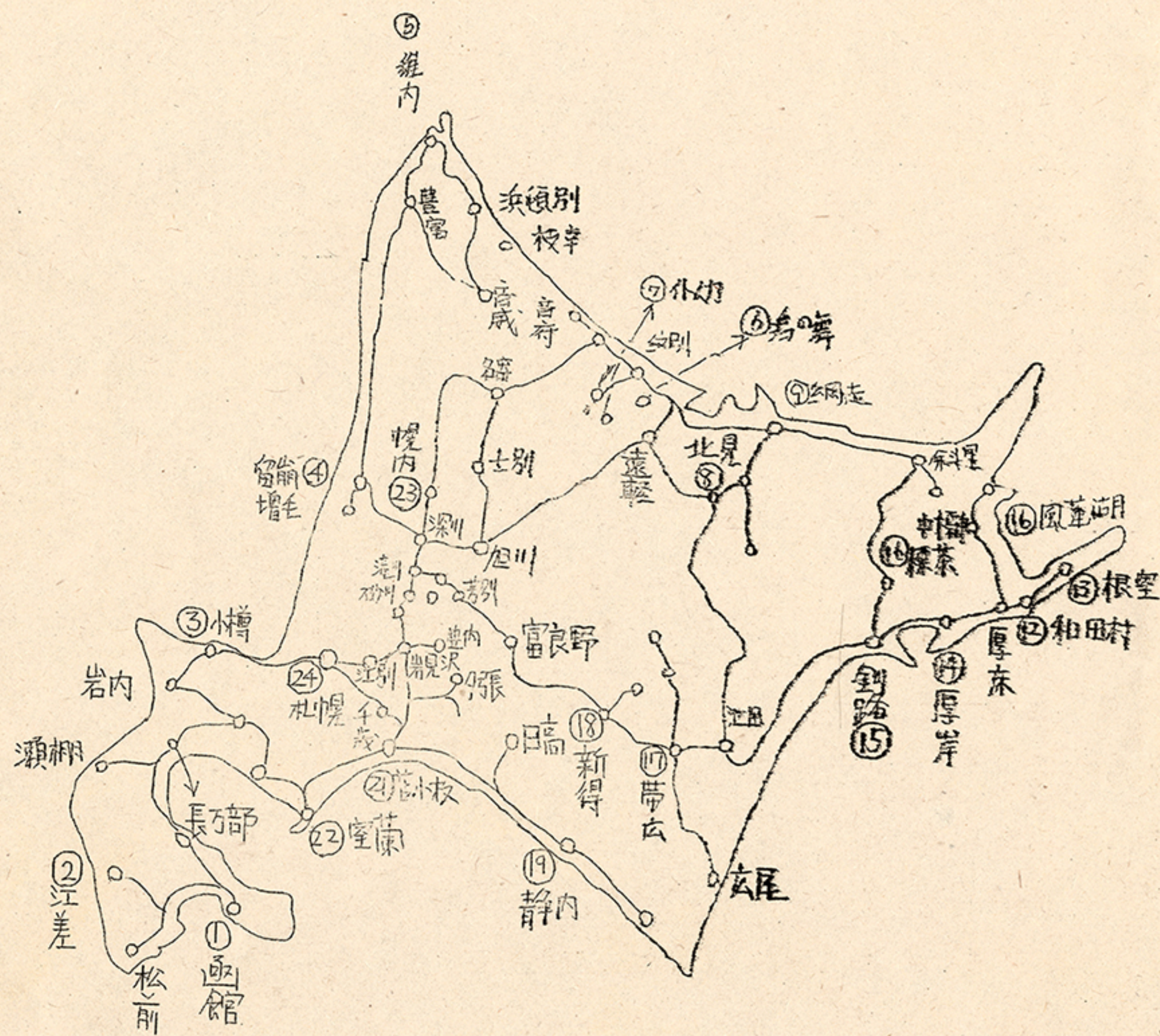
北海道101 年表

北海道101 実行委員会

69から'70に向けて、我々はいまここに集団撮影行動「北海道101」を提起する。それは、一分の身体をもった人間が見果てぬごとくつづく冷徹過酷な原野を前にし、又原野のように懐け親しい思いなど微塵に含まざる、横暴な国家権力に踏みにじられ、じゅうりんされながら、なおその中で生きている人間の歴史と向かいあわんとすることである。小さな身体に子供をおぶり、三人の子供をまわりにし、なお妊んでいる25,6歳の女は何の意志も持たず生きている。どの指も親指よりも太い手を持ち、日焼けした顔に深く太いしめをきざんだ男がいる。ゴードーという強い酒を飲んで明日の仕事に備えるアイヌの漁師がいる。大企業にすっかり組み込まれ、つつまじやかに生きる多くの人間がいる。「東京以北最大の都市」を誇る札幌。そして、漁業の所創路は、いまや一大コンビナートへの変望を返げようとしている。我々は、今原始社会の貧しきから、現代の管理社会の繁栄に至る広大な流れを同在させた北海道に向かうとき、一切の幻影と虚無を打ちくたせ、いまの現実(=北海道)において具体的に存在する敵と対峙していくなかで、我々人間の課題に向って明確に構築していくことを据える。我々の任務遂行は、正しく地を這うゲリラ活動であるだろう。

「北海道101」において、我々は文化の考え得る全ての、そして全く新しい方法論を駆使するだろう。表現方法、組織体勢、全国的展開方法全てにおいて……。

「北海道101」集団撮影行動隊の結成に向けて、全国の連盟、サークル員の主体的参加をここに呼びかけたい。



① 函館
大正時代からの建物、倉庫が残っている（西部）
今……東のほうへと街の中心が移っていく。物産的繁栄が
あまるところなくある。人間のいかたがスタティック。
金持は地元で投資しない。商園がくわれてゆく。
青函トンネルができると通過地になるので、今街を変える車
に役所がけんめい。土世の人はあまりそういう凡には嫌が
ない。

② 江差
漁師の陽に焼けた、しわの深いおばさんがひっそりといん
きんに話している
商法……合様ではなく、紅のたれ幕をかけてやっている感
じ。色々なことが固定している。
ニシン大漁の時——「江差の春は江戸にもない」

③ 小樽
へばりついた汚なさ、活気がある
人間と人間、家と家がかさなっている感じ。
黒っぽい感じ、沈殿した感じ——日華時変以降、
ゴリッとした感じや、やくざっぽい人間が多い。都会的弱
さなんぢはみじんもない感じ
ツタ小屋みたいなバーから色々なバーがいたる所にある。
樽内炭坑の積出港として出発した。
町営の女郎部屋。
「かはい金量時、何しに焼けた、寝てて金とったその罰で
三十三間はらりと焼けた」

④ 釧路
魚の臭がプーンとする
夜中、バーからソーラン節と女の挨拶、田舎臭いときつい
化粧をしている。住宅地——整然としている
高級住宅が大人っぽく、しっかりした感じ。

⑤ 稚内
バーの女の子が中でいちゃついていて、出ていった（客が）
とたん「バカヤローン」
「アメリカに土地とられちまった」と、我々と語る昆布と
うのおばさん。
市民憲法——漁村には適用しない。高級住宅地が目につく。

(6) 鴻，舞

町というよりも住友の会社。
町人が土地の事を考えない。
住友の中で、生活が安定した町。

⑦ イトム力 (水銀鉱山)

國鉄縮山の責任者は「戦争でもあればすぐ立ち直れるのでは
ないか」と語った。それは、余り陽化のどん底を思わせる
ウソ口なひびきがあった。労働者たちの表情も、活気がなく
その足どりも重い。顔は鉄毒の為、みんな青白く鉛色だった。

⑤ 北見

白糸川下、綺羅田、ジボンの目。
ビルが連ち並び、この地方の物質的富の中心地。
人間——これほどよくいふ弱き都会的。

⑨ 網走

町のさわやかさが刑務所をゴッソい感じにする。刑務所
刑務所——予いレンガの建物でされいな感じ。
「綱走番外地」上映禁止 歌わせな。い。
肴子——からの悪いのが多い。
娘——町で一番ぐねている。心がすんくいる。
子にないものか陰鬱されている所。
わいるを送るとその象の前迄 道路が舗装される。
ヤクサが金くさい町。 (トス)
秋に帰ると、殺しがある。短刀で—— 遠洋漁業の秘

⑩ 別海町

いよいよ20日肉食つゝ、そのあと離農した。
離農したあとの土地を分けてみて、今は、食べる様に作
りた。平均400万円の借金
パイロットファーム——10億の国費を投じた所——それから
5年後、土地を開拓した後、借金のために離農、日本一
の自衛隊等の練習地。敷地の中を戦車が通る。

⑪ 根釧原野

「今、もう一度、根釧原野の空虚な広がりを感じるか。それからフロンティアの死を、いたたまぬ気持ちでいつか聞いた。つまり日本の農家の零細化は、土地の多少、何とによるものではなく、その経営の構造と体質によるものであることを、このフロンティアの死はものがたっている。」

⑫ 和田村

北田兵衛上、もともと悲慘をうけぬ所。
 今は黙の前にかたむいた古い家が10軒ばかりある。

⑬ 根室花咲

町中に、暴力を防止しようとする看板が多い。
漁市場で働いている若い女の人——髪を高くゆい上げ
をうる感じで働いている。夜はバーに勤める感じ。
会社との間 バスで送り迎え
男の顔——さっし感じ、目が鋭い。
バーが沢山あり、気軽に一ハイ飲める所が少ない。
ビール 1本 350 ~ 500 円
自分が船を持つている漁師、仕事が終わったらゴード酒
4合飲み、八時に寝る、夜中の二時には 仕事に出か
街に遊ぶところは何もない。

⑭ 厚岸

近郊の南拓農民がぞくぞく感じ、遊びどころもなくなり、
ふくれ店が同直恐いになんていふ。

⑮ 釧路

街中、いたる所ぞ土木工事。ほにりほく異様なま
 せうがある。
 離農した人肉——土方、日雇に入る。
 北海道開発計画で大コッピアートに脱皮しようとな
 やクワが根をほっている（北海道——）
 ハビ女がピッタリする街
 表情——愛をほいでハビを口から入れ鼻から出す——

⑬ 風蓮湖——漁業開拓

樺太 同後の漁民を戦後集めて村を作る。——外国
の日本育ち。
漁民アパートに丁残る。貸付金利息年一割。

①⑦ 帯広
清潔な斗争

白くきれいなヘルメット

白いワイシャツに黒いズボン

①⑧ 新得

25,6才の若い女が子供をおんぶしていた。その子供の目つきはうるんだ目で悲しそうな顔をしてこっちを見ていた。

回りに5才を頭に3人の兄弟が淡々な感じのしない淡白なうすよこれた洋服をきてしゃかりに感じで立っていた。

彼らは肌にはつやがあるけれどもその彼女の体つきからは「私」とか「我」とかがみじんも感じられなかった。そして、また彼女は5ヶ月位の子供をはらんでいた。

①⑨ 青戸内

北の道で一番エードーが飲まれている。

②⑩ 朱坑

ゆったりとした感じの一共同体

行き場所のないことを感じる

山、麓地、統出、すきま風がふく地帯、

いためつけられた人間の重さ。

またない！ 町中がゴミだらけ、川がまっくら

子供が遊んでいるのをボーッと見つめるおばさん。

今たく目がつりあがっている人間が多い

女——悲しい顔をしている。やりたい事をしらないで生きてゆく。

②⑪ 苦小牧

東の横にコカ・コーラのビンが2ダース、降りにつけもの石が並んでいる。

ソリがなくきれいな街。緑の公園ときれいな家。

②⑫ 室蘭

赤茶けてゴミッホイ町 黒い町

赤と白の煙が丘を越え、太平洋にたなびいてゆく。

人間がつつましく生きて一生けんめいに働いている。

〈労働強調〉 女——中途半端なうさぎ方。冒険——車を盗むこと。富士製鉄と日本製鋼の二大企業が丘をへだててド

カッとして腰を屈えている。

②⑬ 幌内

馬が暴れて、車がまたと思ったら人間がいなくなった。囚人によって開かれた。

②⑭ 札幌

空々しい清潔感にあふれた町。

今入る女しか目につかない

東京以北最大の都会

日本一タヤカフヤケタ町。

人間の頑張がなく、ここは町。

斗争が絶つてなくて、回りをとりかこむ市民に何ものでも打ち居え得ない感じ。

資料

1947年7月13日、戦災者北海道集団帰農に応募しに
200世帯約1000名のオニ次オ石北農兵隊が上野駅から
北海道へ向かった。敗戦一ヶ月前のことである。
「北の真月空 希望に明けて、ゆくよ我等の開拓兵士
拓く三沃土に新生活の君に幸あれ栄あれ」歌に送られ
「北農兵隊」再起の新天地へ向う。

現地の公会堂で、帰農者受入地の現状から伝えられた。
道庁からきたのは帰農者割当ての書類だけ。用意された
開拓地や墾やされた土地はなし。農具も種子もきてはなし。
と彼らは云うのだった。「みんな首はなし」と彼を取り
囲む人たちに對して「しかし土地はオ石北銀行が農家
から差押えて荒地となったものならば、幾いこでもある。
それを自分たちであたって、作するなり買つたりして開墾
するつもりならばいいだろう。ただし、そういう土地は何れ
も百姓が夜逃げして捨てていったり、暮せなかった
土地だ。」と彼は云った。後に私たちは耳を指導員
になる馬車追組組合の言葉に、帰農者たちは耳を
疑った。町長と警察署長は東京から、この土地にやってきて
この土地にヤミをばびこすようなことは徹につしんで
もらいたい。違反者は断乎取締る」旨を強調した。

■する土地の目当ては皆目っかなかった。私たちは部落
のハに頼まれて牧草刈りや除草などでした。部落の労力は
男が兵隊にとられて全く不足し枯渇していた。農業や中
学校の学生が長期援農できていたが、東小部落に僅かに二
人に過ぎなかった。帰農者のほとんどが全部が農事に未経験
のため仕事はほかどうぞ、しばらくすると頼みにくる人は少

なくなり、やがて敗戦を迎えた。八月十五日の夜、オもく
まで私たちが恨みが出た。暗い中で「オ」を
まされたのだ。こんなところまでまされて運れていられ
たんだ。帰して貰おうじやないか」と叫んだが誰も答へず
おしだまつたままだった。帰るにも帰れない状態である。二
ともその頃にはもう誰も知らなかったのだ。どうなる
のだろつかという不安と我々を棄てられたのだ。政府は東
京では戦災難民化を防止するため美辞麗句でいつて連れ
て来たということを知らないわけにはいかなかったのだ。
一戦後北海道の開拓—— トキメキト「日本人」棄民お

開拓地には開拓者も、小川も、建てばいぬ、め、たの、日、10月、入、って、
からである。二の頃には、さすか、上、町、役、場、へ、肉、拓、者、着、手、入、る、と、
か、算、置、も、道、庁、の、算、で、建、て、ら、れ、る、二、階、組、み、の、木、を、な、う、ハ、カ、ク、
別、に、1500円、の、大、長、柱、を、お、出、さ、れ、て、し、ま、う、。、炭、の、原、土、め、
並、べ、て、け、ぬ、板、を、お、出、さ、れ、て、し、ま、う、。、炭、の、原、土、め、
も、か、け、ぬ、板、を、お、出、さ、れ、て、し、ま、う、。、炭、の、原、土、め、
円、を、お、出、さ、れ、て、し、ま、う、。、炭、の、原、土、め、
地、面、を、お、出、さ、れ、て、し、ま、う、。、炭、の、原、土、め、
地、面、を、お、出、さ、れ、て、し、ま、う、。、炭、の、原、土、め、

毎朝土曜日は氷がはり、それを割って中に入り、足をきつかにして、くしゃくしゃと粘土をふんだ。火を人然やしたくとも土地は火を吸って、火を吐き出し、また氷がはり、それを割って中に入り、足をきつかにして、くしゃくしゃと粘土をふんだ。10月24日の暮れ方、初雪になり、朝道に雪の中で、木駄の縮を切らして裸足を歩いて帰ることもしはしあつた。そんな時、15才の少年である私は、当時ラジオがよく流していた「南から、南から/飛んできたきた渡り鳥/喜びに/悲しみに/富山の山を眺めていた」という歌を大きな声で歌って歩いた。寒い林いからである。その歌「南から」のメロディーを、よくたんに、母はあめいやだ、という顔をする。を、おーっとする、というのである。北海道の自然は激しく冬に移り始め、ようしゃなく牙をむきだしてきていた。川に壁は外壁にけしかねれなかつたから、道路をおおっていた。イトリは葉を落とし、雪の野がとこまでもみえた。

農民たちは山へ降り、木を伐り、運んだ。私はH家の人と共に馬車、で薪材運ぶをするなかで、馬の使い方を覚えこまされた。西士別の長い峠を越え、いっけいに田を耕し、馬を追う。見よう見おかに前の馬追いか、鞍の上には立てば立ち、座れば座って、重んじて、機が動かすのを防いだ。雪道には、水がやすく下り坂では、幾度も機をかえしては、怒鳴られ、ようやく平坦地に、さしかかると、気がやるみ、暗い中から起きて、馬を山へ急がせる疲れで、無性に腫くなる。ハッと気づくと、機ごと雪の中に投げ出され、後方で大人達が大笑いしている。居睡りして馬追うのをみつけて、皆で手をかけて、雪の中へ機ごと転がしたものである。

開拓生活は困難をつづけながらも、序々に安定に向っていた。水田化は進み、その水田に暗渠排水を施す。山から赤土を運んで、泥炭土に客土した。冬の土地改良作業は苦しかったが、造新山へ働きに行くよりは、遙かに良い状態だった。開拓地、7年目の3月、姉は勤務する小学校のPTA会役員で、部落の名士のすすめで、隣村の中学教員と結婚した。半年でその結婚は失敗した。複雑な家庭事情のある家の息子である彼は、異常な性格の性不能者で、姉はいつみれば、人身御供とて送られたようなものだった。私たちの一家の他は、村の人たちは姉の嫁いだ先方の事情や相手のことを皆か知っていたふうである。この結婚に最後まで反対しながら、母に強行され、また失敗後の収拾を自らが全てしなければなら

うた。私と母との間にも、相克がつのつた。姉は結婚をめぐり、問題は村の中での開拓者、帰農者たちに別れたら、とやほりあつた。開拓農家には、嫁にくる人や嫁にやる親がいはいということである。農家の嫁不足が、後に、しつと社会問題のようになられる。朝が、出でくるが、開拓農家のこれは開拓始って以来今日まで続いている。姉の場合は、それの裏がえされた。青年期特有の人生的煩悶に、ふっかつた。母もこの煩悶に、ふつた。母と私の開拓生活の出発には、それがあった。私と母は、母の母の場合、そのこと、人間の複数を、したいという願いがあった。私に父を知らず、子供の頃、それと知らず、あつた人、戦後、母も死んでしまった。しかし、私のその煩悶は、周囲の農民たちとみていると、ひとくせ、いまだ、こゝに思えたりもした。例えば、父老夫妻、離農後、満州から引揚げて、入植したYは、H家の主人公の甥であつたが、父に逃げられ、母に捨てられ、こゝで暮らした。母の開拓地の近くの誰彼にも、そのよう者は多かつた。既、我輩のトでは、盲目の老母が、膝を這い、母の家の周囲の畑で、草取りをする姿が、よくみえた。当主のトは、幼い日に、その母に捨てられ、長じて、小作農として自立したとき、母が、帰って来たのだという。トは、その母を母として扱わないようであつた。M兄弟の場合、こうである。夫に去られ、母と娘の小作農に、一人の男が、婿養子に入つた。彼は、母と娘に、一人づつ、男を、生ませ、それを兄弟として育てた。母の方は、流石な、涙で、目を送り、盲目に、なつたと言われ、その家族は、一ツ、屋根の下に、肩を、寄せあつて、暮らして、いた。母と私の開拓地、余計、向いて、ちい、倒れ、か、つた家があつた。昭和初年の凶作、業恐慌期に、農民たちは、その家の渠に、ナワを、下り、と首を、くく、という。

北海道へ渡つて、間もなく、本明寺から分宿したY家には、二人の子供が、いたが、数年後に、ある夏祭に、サーカスへ、連れて、い、つた、ことがある。その子、F

ち母見あき疲れると、ゆり起二してもサーカス小屋の土間の泥の上にねてしまう。いつも親にフイは鼻へ行き泣きながら親の後を追っても構ってもらえず、遊び疲れたまま親の鼻の上で老に頬や額をつけてねいつてしまう日常習性となつてしまつてゐることに驚いたものだ。親たちもそれま不順と見いつつ馴れてしまつてゐた。疲れた母親の乳房をくわえた儘窒息死したり甚だしいのは棟つづきの畜舎から出た豚に、厩間で眠つてゐる赤ん坊が噛み殺されたり、赤ん坊の上に猫がねて取調べられる中に発狂した農夫などゐた。それらはみな忘れがたい強烈な印象と懐りと共に与えた。それ~~を~~してゐるような話を随所にあつた。また農民からきかされ、知らされる戦前の川作時代よりも更にそれ以前の開拓初期の農民の状況は想像を絶することだつた。それには比べればお前たちは、と私たちは云われた。そして、私たちは帰農者と蔑視し甲斐性なし、東条君に何か出来るか俺達百姓がかつてなめさせられた辛酸はお前たちに判るか、と白眼視する農民の多くも、内地府集の農村から追われ棄てられ逃亡し逃亡してきた者であり、その末裔であることを知らされたのである。

ドキュメント日本人「開拓者の悲劇」

屯田制度の起りは寛政12年(1800年)に幕府がロシアに対す警備のため、当時千島で起つた蝦夷乱を契機に富国強兵の途は宜しく屯田兵を設置するに如かずとし、勇壯、白糖に初住屯田させた。彼らは八王子同心で、風林火山からなるが南東平野をうかがう山岳武士の国勢の人々であ

つたが扶持を与えられ、かつての主家の侵入を防ぐために置かれたバリケードが、北方侵略に備えて移動したものである。彼ら武士が辺境の土地に住みつきその土地を耕して食糧を自給しながら警備するということは平時とはいつてもそれが4年で二と二とく冬の凍川に破れ、彼れらが勇壯平野に残したのは30基にあまる甚むした墓石だけである。

オム回の屯田は黒船来航に始まる。このとき再び幕府は北方警備にせまられ、奥羽各藩に警備を依頼する一方、借金のある貧乏士族、浪人、百姓、町人等をかき集め、七重村、室蘭、琴似に初住させた。しかし彼らは貧乏旗本や浪人共で農業経験者ではなく、「もっぱら捕魚工業として」蠶繭として英日を送り」という事情であつた。徳川幕府は真意は向んでおれぬ人々は、賭博に氣をひかれ肉體には身が入らず、また冬場にさらわれて死んでゐた。幕臣の多くは維新の動乱に集じて逃げ帰り、残つたのは僅か数戸の邸に逃げうめぬ人々であつた。

三回目の初住は明治7年、明治政府の開拓による屯田制度である。当時、ロシアと千島、樺太を交換する直前であつたため、政府の軍隊は相手と利害を共にすることになり万が一の場合以外の平時は警察的監視を行なうという屯田兵が募集したのは青森、宮城、西田永正族を~~対象~~の士族を対象に行なわれたが口がどらうに再募集には平民もその対象となつたほどである。募集成績の良かったのは青森県で、二二には戊辰の役で幕府の功名を著せられ、会津藩士達であつた。屯田兵の食事は米が足りないのでも、蕎麦、アヲクサ、イタトリの若芽など食べる野草ならなんでも二はんに入れて量を抑えた。それが何ができるようになるかと上はどやがイモを強制的に食せさせ、飯には米いくらにイモいくら入れるといつて毎日飯の検査をして食わせた。朝はイモの塩煮、昼は塩

ゆでのイモをすりつぶしたイモ餅、夜はフリキに釘で穴をあけておろし金で生イモをすったもの生えた団子で、イモイモイモでした。」と当時を古夫が語る。(根室)

結与品は食糧の他に武器に軍服、農具として鋤が二挺、マカカリ、鋸、山刀各一挺、砥石二個、ヤスリー一枚、鎌二丁と筵一枚。家具として鍋が二枚、釜一個、鉄瓶、ドンブリ、茶碗と皿、椀、米と麦桶に手桶一荷から、ニもし桶までが支給され、夜具は大人が掛布団と敷布団一組、十四歳から七歳までが掛布団一枚。これらの官給品は、給与地や兵屋と共に時々検査があった。上は局長から大隊長、中隊長、小隊長と上から下まで、検査検査で追いまくられ、椀が一つ足りなくともひどく叱責を受けた。そんな場合には検査の終わった家から、裏道を通って検査官の来る前に隣の家へ届けられ、また人目に立たない藪道を走って帰った。深い未開の藪道はそうした屯田兵たちの小さな秘密をかばうのに、大変有効なものであった。

朝起きて身支度をしソマゴ(わらグツ)をはいて家の中の雪をかたづけて、それから朝の火をたいた。焚火のあたたかきで煤についた雪がとけて、バタバタと煤水が背をぬらした。吹雪のない日は寒さのために夜中に寒気がはしけりようにバンバンとなり、布団の上が真白に凍り、あたたかいご飯を食べていると茶鉢の先のちが草小屋にふり住めない自由村民がうらやましがられた。彼らは何んの保護もないもった在田のあたりで野嶺に近い生活に耐えなければならなかった。そうしたなかで屯田兵の囚人に対する態度は同情的であった。「二二に入るときは私はまだちつでしたから、お婆さんと一緒に囚人のがつぐカゴにのせてもらいました。カゴの底にガガガガと笹の葉の敷あたる音がしましたから随分ひどい山の中だと思いました。その囚

人が直つけにきてあねちゃん煙草くれ煙草くれというものがから、煙草を紐につつんで落ちてくるの拾うならいいでしょう。二つもやっただけでなく落したんですからね。するとね、それさ口の中に入れてかむんですよ。そして手と合わせてしまいいした。下には下があるものだと思います。」(琴似)

私のとこ三一年の新兵だね。山形の鶴岡から御殿というところから最上川を舟でくだって、酒田でも随分とまって、本直さんのお祭あったでにオヤカで、皆遊んでいたり火事だ火事だといって火事になって、皆集まった、汽船が入ったからのらんければならんというので、その時は物凄かった。それで船にのったでしょう。そして客船でなくて、荷物船でしょう。その段々の棚のついたところさつと二すれて、そしてペンキ臭いというんだが何だか、そして上で小便したのが漏ってくるしさ、そして四日四晩かかって細走のかげ(ホンモイ)さあがって、山越えて西へ出たの。そして荷物小屋にとめてもらってね。次の日晴いうちたって、細走翔舟できて、一号の駅通にあがったらホソホソ雨が降ってね。そこのラジはいて、ペチャペチャ歩いて来たの。だから忘れられな。私が十六になって家が壊れて四つの子供おぼれてね、母親が子供でできるようになって歩かれないで馬車でつれてきてもらったの。私たちね内地でるとき、田中の妹がうちの兄さんに嫁に来て、私が田中に来てやりとりしたの、式は内地でしたか、本当にやりとりしたのは来た次の年の春だったの。

私の兄弟采山いて八人家族だったか、こまったから、あたり前に米もろの地主と嫁さんと、父親と母親と私だけ、だから実家ではこまったよ。それに九月に来たんだから、何もくれないでしょう。家もひどい家さ、台しなれば入れない上台の高

い家さ。入ったら中に木生えてるんだもの、おさなあと鬼
ったね。

それに私嫁になったって身体小さいし年はゆかんし、かはな
いし、どんだけ恥しい鬼しいしたか、泣いて泣いて子供ができる
まで泣いたね。身体は小さいでしようかは弱いでしよう。それ
でも嫁でしよう。あれで嫁さんかといわれるの耻しくて、かせ
いで休れとき川さ木のみに行きつりして、川の中へ顔つ、ニン
で何ぞ泣いたか、そして顔洗って来てやったもんだ。

それでつらいから時々実家に行くの。うちに行くといいわ。
それで帰るの一分でものがすべと鬼って---帰るとき東相内の
坂のとこ、アニアンて大声をあげて泣いて帰って来たんだ。
そして叢のかげからヒョコヒョコッと女衆が顔出したので、
びっくりしてやめてしまったの。今だから笑うんだとアハハ---

本当に子供でできるまでいつ死んでもいいと思った。風呂が四
比にあつたかよるねる前に風呂へ行って帰り、神社の前通るの
で塞銭あげて牛合したもんだ。子供でまたら心おちついて、
ニったらニきとしていれないと鬼ったね。私の姉さんはあとの
ない人(竟地鬼でない人)なども、何でもがりがりいう人だべさ、
づらかったよ。家へ帰れば実家の母親は「それほどづらかった
らお前何とかせといいたいか、うちへだけは来てくれんなよ、
うちには子供多いし、こうして嫁さんに面倒みてもらわなけれ
ばならぬしあるから---」というから泣くよりないでさ。や
ったわ、と、たりだも、私帰ったら嫁さんいれなくなるべしね
。私も嫁さん小さいときから奉公した人だから、お互苦勞し
たんだ。

ハツカ作ったときもづらかったね。雨が降ったら縄ばし。天気
いいと夜半過ぎまでハツカかり。帰りいっも夜半過ぎだから、
心がねえって歩いてるんだ。だから足がテックラテックラ

ってして目あけて、帰って風呂は五時になってお天直すがあ
がっても、おさなにいけれども。昔朝仕事しないで朝飯食べた二
となかったよ。

私の家~~実家~~は内地で大工だったの。百姓なんて知らなかつ
たが、北海道へ行ったら絶対大工しないといっていたが、兵庫
がどののてたのまれて随分家なおしたね。舅爺さんは木を倒
すとそこら一杯になるので、木にのびて枝おろすの。それで
何度も死ぬ目した。堤防にあつた大きな桂の枝おろしたときも
、綱で木がかりありて来たら、綱が木の枝にひっかかて中崩ら
りになってしまつて、今はなせば下におとした枝が櫓みたい
になってるべき。それで皆がハシリゴつないでもとどかないし、
大騒動になり婆さん神様をおあかしあげてたのをべさ、どう
も仕様なくて鬼いまってとびおいて、それでもハシリゴと木の周
におちて助かったの。ニ七号でも枝おろしして落ちて馬車
に束せられて来て---器な仕事の上サな人だった。苦勞した
人なんだから、ニまっている人をどれだけ泊めたかしらない人
だった。昔汽車も馬もないとき旭川へ行くのに、歩くよりな
いでしよう。その人達が毎晩にうちへ泊ったね。だからおがずつ
くるとき余力につくっておかなければなんなかった。自分の
こころで子供も夕いのに、ちゃんとか客あつかいして警察から
食までとめたよ。道路人車や鉄道のタコもかくして人に見られ
ないようにして、夜車で送ってやったりしてね。

私は悲しいときは鬼仏さうたにして、草取りでも何でもうた
いましたよ。歌なんてうたえなかつたね。かせわがうらくてね
。ナマニダブツ、ナマニダブツ、ナマニダブツ。

日露戦争のときは子供一人、腹の中へ一人おいて行つたの。
金の心配だけは舅さんしてくれたからよかったが。---何だ
って仕事に苦勞したんだ。もうその頃は扶助米もないでし
よう。それに米はとれないし、路とかうルイ(タチキボウ)とかと
つて来て、飯に入れました。味噌がなくてゴシヨイモ煮てっ
して塩入れて、それでみそのがあり。その塩だつて綱走す
て行かないと買われないうし、買物には馬で夜通しかけて出かけた
ものであつた。うんまいもの食わなかつたから病氣も一つもな
かつたね。

田中ヨリ娘談(明治十六年生れ田矢妻女)

凡此三事入乎より

仁右衛門は自分の耕した畑の玄米を一わたり煮足りうに覺やっ
て小屋に歸った。手ばしにく畝を洗ひ馬糞を作った。そして鉢巻
の下ににじんだ汗を袖口で拭いて炊事にかかった妻に先刻の五十
錢銀貨を求めた。妻はそれを見た手づには二三度横面をなぐら
れおぼたならなかつた。仁右衛門はやがてふらりと小屋を出た。妻
はひとり淋しく夕食を食った。仁右衛門は一片の銀貨を腰かけ
の井に入れてみたり出してみたり親指で空に弾き上げたりにな
から市街地の方に出かけた。

らもん小裡で言妻き
 か事国の炊んとた抱
 つの正分屋込し横
 藤裡自る濱わまさ
 佐炉かたり、覺妻
 過。因門すすてめ
 ま。は衛かっ、眼
 だ。わ三人をぐ寄りと
 けに現て。は着り驚き
 け口なした妻にがえ
 ぶ戸にこたせけめさは
 夜の座話り困るくは
 け花鼎盛て新よく衛
 場佐と馬おたくき右
 農然十上過出し抱仁
 だ突ちけをみらを、
 え下。解時は看妻とた
 と嫌た七一の戯にる
 酒つら打十線悪うす
 九時酒れかにて門る
 九時しな時け衛かよ
 時いりみ左右かがく
 時明酔飲りま右リ上
 九時衛にた着背。乗
 仁右酌まにたて抱抱

[illegible]

「痛い」それか聞きたかつEの下。彼の肉体は一度に油をアアま
かけられ、アア立っ血の気が、に眼がくろめ、た。彼小キ
赤い女に飛、びかか。ア、折々わす、殴。たり足蹴にしたりした。
女は痛いと云い、腕ケな加らも彼たからアアアア。アアアアアアアア。
いた。彼はとうとう女を抱き、くめ、歯路に出た。女は彼の顔に
鋭く、延びた爪をたてて、迷れようとした。二人は、かみ合う犬のお
うと組み合、て倒れた。倒れた、加ら争った。彼はとうとう女を
リ、した。はね、起きて、追リに、か、一、目散に、逃げた、と、思、つ、た

女房、反対に抱きつりてきた。二人は互に情に堪えかねてまた
段々たり引つ掻いた。彼は女のたがひを掴んで道の上ま
ずるずる引つ張って行った。集會所に来た時は二人とも傷だら
けになって、ぶるぶる震えながら床の上でぶっ倒れてゐた。彼
は門の中に突っ立ちながら短くふうた喚奮のためによろめいた。

[illegible][illegible]

夫婦が歩き着いたのは国道五十町も俱知安の方には来た左牛の
 周の上にある村の共同墓地だ。そこは二セコアンの大明の光るも襲
 一面に見渡るようた。夏夜の光るも襲
 疎も手に取るようた。夏夜の光るも襲
 ・月の光が隣のようた。夏夜の光るも襲
 の群れがわんわんとうなつて二人に襲りかかた。蚊

弱ちけまほ
立ちだん
の音かん
塔むが
石ひや
や喰はし
標食はし
墓土。書
な。書
さの。書
小似た。
また。立
また。殺
たし。殺
りだ。殺
負リ。殺
背王。殺
五堀。殺
穴を。殺
に。殺
体。殺
死。殺
は。殺
門。殺
衛。殺
石。殺
な。殺

どの穴を掘り終ると仁右衛門は鉄の棒を休めて顔の汗を手の甲で押し拭いた。夏の夜は静かだった。その時突然恐ろしい考えが彼の吐胸を突いて浮かんだ。彼はマの考えに自分ながら驚いたようにあきれて眼を見張っていたが、やがて大声を立てて頑童のゴとく泣きおめき始めた。その声は醜くものすごかった。妻はきょとんとんとして、顔じゅうを涙にしながら恐ろしげに夫を見守った。「笠井の四国猿めが、嬰子ニと殺したぞ。殺したぞ」彼は醜い泣き声の中からうめくんだ。

それから仁右衛門の言うままに妻は小屋の中をかたづけ始めた。背負えるだけは雑穀も荷造りして大小二つの荷が出た。妻は夫の心持ちがかわかると、また長い苦しい漂流の生活を見えやうと、おろおろと泣きかきながら、夫の荒立った気分を忍んで涙を飲みニみ飲みニみした。仁右衛門は小屋の奥中へ突っ立って障から障まで目測でもするように見まわした。二人は黙ったままうまごまはいた。妻が風呂敷を被って荷を背負うと、仁右衛門は後から助け起こしてやった。妻はとうとう身を震わして泣き出した。意外にも仁右衛門は叱りつけなかった。そして自分は大きな荷を軽々と背負り上げてその上に馬の皮を乗せた。二人は言い合わせたようにもう一度小屋を見廻した。

有島武郎著 「カインの末裔」より

「折から降り来る粉々たる雪を、ああ良い眺望じゃと水晶を欺むと硝子窓越しに見て喜ぶ気持が儼然と取り當つた。それに引きかえて運わるく生まれた者は何の罪作ろうでもなく、昨日産聲揚げたばかりになつた、破れた襁褓を受けて命脆く、乳の味もよくは覚えぬ間に終る嬰児の様に諸らぬ目に逢う事あり。貧と富と長寿と天死と発達と夭折と強弱と何のずからなる世の裏表は無くて叶はぬ定めなればよくあきらむべきことなからずあきらめはつかぬものなり。

語らうか蝦夷の歌かし、語らば恨みに聲も立たぬなるべし、書かうか其恨み、書かば悲しみに筆も凍るべし、リで書き添さん墨の痕、濃かれ薄かれ我筆凍るまで」

幸田露伴著 「雪粉々」より

幸田露伴 「雪粉々」について

武力による威嚇や欺瞞的和睦による懐柔政策、これがアイヌに対する日本人の姿勢だった。窮鼠正かゝの一触即発状態がついにアイヌの不安と不満を爆発させた大動乱こそ世にリウリャクシャインの乱であり、この悲劇を材料として仕組まれたもの。

— ∞ —

土籍を剥かれた家系760余名は数千の家族とともに一挙に土民となされ、路傍に投げ出された。非難と怨嗟まじりの余地も置かせない処分であった。そこで思いは蝦夷地に走ったのだ。

死力を尽くして開拓つかまつるべし……何分にも自費ももつて千万倍 死力を尽くし……前罪の万分ノ一にても相償い申したく

本庄睦男著 「石狩川」より

「石狩川」について

著主伊達邦夷は一万五千石からただの六十五石に減俸されお家断絶はまぬがれたものの、米一粒さえ屑肉の肉で奪い合わねばならぬ事態になりかねなかった。家老の阿賀重謙は藩士に計り、新たに死ぬべき場所をもとめて、北海道初住を断行した。明治四年三月だった。第一次開拓集田が不生の新天地を開墾の鉄まじるえる様才=次初民募集にいたるまでの間の出来事を描いたもの。

「百姓記」(吉日十四雄著)について

十勝農業開拓の山本源三一家をあって書いておりさんさんいどい目に合ってき、我身大事ということをオーと考え、成功するしかないということに掛けてゆく。妻はやましく、弟は正義感にあふれてる人間。二の一家の各々の死に至る迄書き続ける。

「土と人」(早川三代治)について
農業経済学者の皮徹した目でつづらきに観察した根釧原野の連綿的不死性に取り柄し「死の原野」にしろたけられた目もあてられぬ農民の惨苦を揺れた。

「寄生木」(徳富蘇花)について
明治41年当時の軍国主義に入つていこうとした時代に失恋し、職を捨て、病をえ、ついに自殺をする——「恋人の名を呼ぶ」自らの手で28才の数奇の生涯を終えた。その著者ノートをもとに書いたもので北海道がかなりのウエイトを占めてい

—北海道資料—

〈アイヌ虐待〉

アイヌには全く救いの道がなかった。せっぱつまって反乱を起したのだから、それは鉄砲によって鎮圧された。寛文の乱の時にも奥地にまで強硬な豪族が残っており、松前藩と戦うことも辞さない豪語する酋長もあつたが、この寛政の乱では完全に屈服した。アイヌとしてはこれが最後の反抗であり、以後はかたはる虐げな仕うちをうけても、もはや起さず、力さえずい奴隷への段階へ墮落していった。後松前藩時代のわずかに三十年代に、アイヌの生活はひどく窮乏なものになつていった。この時代の請負人はもはやアイヌの生命を握る絶対権力の者であり、これに服従せぬ限り生活の道はなかった。その漁業規模はますます拡大され労働が強化されてゆく反面、その収入は極めて少なかった。

それよりも恐ろしかったのは、離島への強制出稼であり、出稼でアイヌの取扱いは非常にひどいものであつた。これを取扱う番人はほとんど無頼漢に似ていて者どもであつたのでその行動は暴虐のかぎりまで尽した。女は妾とし、夫婦者、夫と別な漁場で働かせたのを自由にし、妊娠すれば、墮胎薬をのませ、男は昼夜の別なく働かせ、そのため病気になる者が小屋へ押しこめて食事も与えなかった。こうして働かなくなるまで、こき使うので、20年間も郷里へ帰されないうちがあつた。それでアイヌは国後島をアヲタコタ(地獄)といひ、それへ送られることを非常に恐れた。そればかりでなく、労働力

不足すると山の中に住んでゐるアイヌにまで、アイヌ狩りと称する事を行つた。こうしてアイヌの人口は後松前藩時代の30年間に著るしく減少を示す。

(網走小史より)

〈囚人の強制労働〉

樺戸集治監、月形潔の発案によつて囚人は道路や炭坑労働させられる事になった。彼らは固より暴房の冤徒なれば、其苦役に堪えず斃死するものも、尋常の工夫が妻子を遺して骨を山野に埋むるの惨状と異なり、老いに入らぬに堪えず斃死して其人員を減少するは監獄支出の困難を告ぐる今日に於いて止むを得ざる政略なり。幌内炭鉱で600~1100名前後を使用し、釧路跡佐登硫黄鉱山では10年契約で硫黄の採掘、精錬に使用する。幌内ではマラリア、跡佐登には水腫・脚気が流行し、悲惨をきわめた。1887年、岩見沢・滝川間の工事にあたり安岡樺戸典藏が囚人使用を提議し、道庁の見積りによつて囚人のとらまへ2081円49銭で低上げたのにはじまり、囚人開きく道路の延長は181里以上に達してゐる。なかでも、忠別太・網走間の横断道路工事は最も悲惨な例で、この時、北見方面から入つた釧路監獄の囚徒800人余りは予定路線に分派され二里~二里半を一区画とし、各区に囚人休泊所を設け200余人を分配し、休泊所間の二里余りは両方がら起工し必ず中央で成功することとし、したがつてできれば次に転進するのであつて、休泊所を設けること3で国境に達し、40里余りの未開地の道路開きくさわすか半年で完成せしめた。過度の労働のため多数の逃亡者を出し、また飲料水欠乏と降雨の連続のため一種の水腫を發し、日々数名の新患者を生じたが、患者の配置少く、夏期数ヶ月間に百人以上の死者を出し、逃亡者の中には拒捕斬殺されたものもあつた。しかし、政府の指導者近91年出版の「日本開拓」93年長官、北海道国道などはいすれも、囚人便役を是認し、奨励してゐた。

奥山亮著「北海道史概説」より

〈炭鉱暴動〉

炭鉱には封建的労働組織が強力に支配してゐるうえに炭坑会社は知らず知らずのうちにその会社が三藩閥、賊閥の食い物になつて1910年頃には経営全くゆきまのり有様であつた。たのであるから、労働条件に向上するはずはなく、かえつて大災害の頻発とな

って現われた。

1907年2月1日 夕張一増額要求スト

幾春別、幌内でも賃金スト

幌内抗では、3月23日鉦夫総代四ノ宮友一、山田友三郎は、
支柱夫、堀進夫、採炭夫の賃金ニ割、それ以外三割増額、採炭
夫の精勤賞手正廃し、別に良法をもうけるにと。鉦夫長屋の設
備改善の四頃目正要求。徳永鉦長は3.4のみ同意した。午前十時
か、四ノ宮は三度総代として鉦長と会見、事務前に抗を除き相次
名集合して声援を送るも、のあり、入抗者も堅全な罷業状態に
出た。岩見沢署より三浦警部が巡査二名と百五十名を配下の坑
た。岩見沢署より三浦警部が巡査二名と百五十名を配下の坑
かし事態は、ますます急迫し、同午前八時、四ノ宮配下の坑
約400名は、貯炭場裏手研捨場に集合協議した。三浦は、これ
に解散を命じたが午後七時に至り、再び山神社に集合、境内に
かがり火をたき、時々喊声あげ、また爆薬を投げつた。群
急迫するにいたった。たが巡査は7名で、手づから投げつた。群
なかった。そのうち境内より焼杭、瓦石等を投げつた。群
象百余名はした。山神社より、合宿所前より請願、巡査派
出所前にいたり、瓦石・爆薬を投じてこれに破壊し、一手は事
務所に、警鐘を打ち、事務所に襲撃し、ついに事務所に、その
他に放火して焼杭、事務所に襲撃し、さらには市街地方に役宅を焼
打し、家財を掠奪破壊した。この時、午後九時、市来知消防組員来着
んとするに同時に臨時列車で警官6名が来着し、これをもつて軍隊
警戒した。さらに30日午後、幾春別派出所消防組22名来着。午前八時
名、幌内鉦夫幾春別派出所消防組22名来着。午前八時に、臨時
列車で札幌、江別等より三原保安課長、飯田礼幌警察署長、北
島警部ら巡査7.8名を連れて来着、直に検事、西崎判事、合宿所
に仮調所を設け、午後6時には、蔵木検事、西崎判事、合宿所
来山。同夜同所に仮予審庭を開いた。この結果焼失した建物は
事務所、巡査派出所一棟、倉庫三棟、一才建設宅二棟、二才建
備夫長屋一棟、その他鉦夫需の油類、カンバス安全燈、電気
用品及び馬糧等であった。また検挙者は242名うち下獄者29名
抗夫の斬り殺されるもの3名。巡査の負傷3名であった。山
経営者連盟「鉦山労働史」その後、半年にわたり石狩炭田一帯は
勤闘を続けた。

奥山亮著「北海道史概説」より

明治初頭、人間の住む村落は僅に道南の最端部に点在するだけで、一步でも奥地へ分け入れば熊笹と原始林が生い茂り、熊がその中をわがその顔に歩き回っていた北海道は今訪れる者にその当時の面影を忍ばせることなく、加担するならば物質的な繁栄の幻想をあり余るだけ与えるあの支配体制の中に正確なまづに組み込まれている。

今回のロケハンで私達は去年の夏キャラバン隊で回った時よりかはるかに多くの家が原野に建ち並んでいるのを眼のあたりにも、はるかに都会的に育った人々に接する中で、それを確認する事が出来た。存ん多くの人達と私達は今生活が楽である事と将来の夢を語ってくれた事もある。彼らはやっとなくなった生活と完備した身の回りに一掃にホッとしたところであった。だが相手の熱い口調を聞きながら私達自身はみたくなにならざるを得なかった。

いっさい物質的な繁栄という霧をかぶった化物は、まるで如何様に人間の中に忍び込み、この先どこまでその内部を食い荒してやれば気が済むのだろうか。

6月14日、昼少し前、海路を渡って函館に着く。ホームの木の上よりとした冷たさが北海道に来た実感を与える。午後函館を差って釧路へ向う。気のせいだが列車のスピードが本州に比べグッと落ちたようだ。「まだ単線区間が多く、通過する際の多くで通過待ちの列車とすれ違う。煙をモクモクはき出す機関車から降りた運転士と助手が日陰に腰を降ろしている。涼んだ空と雄大な雲。山の稜線と木の種類をすべて青森までと違ふ。海沿いに、あるいは水田の中に点在する家の中には極立派な屋敷のそのまゝある。北海道を渡る事を

単に食してやるとを生活する事としてはならないと思う。

函館を渡る途中二河内余、それまでの荒涼とした沿線の風景が、列車が曲を回った途端にガラリと変わる。北海道最大の工業都市が何の兆候もなく、突然立ち現われるのだ。港内にひしめきあって停泊する幾万トンの貨物船。銀色にくっきりと赤いマークを印した巨大な石油タンクの群。煙突を模したようなセメント工場のクリニカー。向と大島が遠くから見えているのだろう。心なしか街に降り立ってみると、どこか落着くようになったようだ。

翌日、イタニキの丘の頂上からこの町を見降した時、それはぞっと強烈な印象となって眼に焼きついた。街の中央にドッカーリ腰を据えている富士製鉄と日本製鋼の二大企業の本拠地。そこからは絶えず吐き出される様々な色の煙。街を覆いつくす煙の出所はここだったのだ。風のない日には煙は周囲の丘に囲まれたこの街の上空に佇む。今日のようないくつかある日は丘を越えて太平洋に流れるのだ。紺碧の海の彼方、空と海の境がいつかなくなる方へ赤い煙はじんじんと流れて行った。

鳥の口吻のように鉤状に曲って海に突き出たこの所はほとんどが丘陵地帯で、市街地の大半を占める工場群は埋立地に建っている。それを囲むように建ち並ぶそれぞれの会社の倉庫、社宅、社用車、その他の施設。繁華街や住宅街、学校等はこれらと全く別な形で建てられたみたいだ。また、新築される家は丘の上へ上へと登って来、中心は頂上の海からの風を、またそこに受ける個所に建てたそのものである。この街で会社の社員は、平均して一番新しい車に乗って来るという話。

街へ降りて行って、建物の色が一様に赤茶色しているのに気がつく。屋根も壁も扉も、ここから立つ看板で、鉄の錆とかがつたみたいだ。長い年月工場から吐き出された、空から降下した煤煙の為だ。

街の中央に工場が腰を据えている事でも、北海道の最重点地区に指定されている事でも同じで、空から50キロ程遠くにある苫小牧に行くと様子が全く違うのに驚く。まずきれいな街並。はるかに近代的な構構。ショーウィンドーには都会的なモードが陳列されていて、人々の言葉にもなまりがない。王子製紙の社史館まで道路からゆったりと直進し、余地を基生で埋めた中にある。建ち並ぶ、5階建のアパート。各家庭に湯湯を工場から供給する銀色のパイプが街中くまなく張りめぐらされている。公園が月立ち、スーパーマーケットやキャプテリアが数多く建ち並んでいる。工場から吐き出される煙も真白で向かう所まで清潔だ。

街を歩いて受ける感じが以上の二つの都市で違うように、そこに住んでいる人々も又違った生活を送っているようだった。苫小牧の方が室蘭よりも風通しが良く物産も多くて暮らしやすいように思える。去年の夏の三点合宿で室蘭工業大学のある学生は、室蘭の町が薄汚なくつまらない所だと言っていた事を思い出す。しかし、きれいな市街地、娯楽場、その他諸々の施設の整備された都市とはいったいどんな意味を持つのだろうか。

そこで生活する事が今人間的として幸福な事なのだろうか。僕は札幌や苫小牧のように完備された都会へ行けば、何の不自由もなく遊んだり、物思いにふけったり出来るんだという思考から、今それを実は一つとして自由な事をしている事

にはならぬのかもしれないという思いに変わりつつある。

北海道は広い。今度の10月1日、北海道でもそれぞれの街や村で、人々はそれぞれ異なる生活態度で生きているのを知った。しかし共通しているのは、少くも人々、でも誰れもが悲しそうにうるんだ眼を持ち、そしてそれかえめに振まうことだ。た。

王子製紙の工場に僕に見学案内をしてくれた老人。彼は大正の初期に秋田からこの街に移り、定年後にこうして依頼されて案内を勤めていると話した。彼は自分が王子の人である事が自慢でしかたないようだった。それから札幌から函館へ向う夜泊の途中で何人か話しかけてくれた伯父さん。彼は釧路で生れ、十年以上も道沿い歩きを転々と繰り返している。久しぶりの休暇で札幌の弟の家を訪ねて帰り、金ビールを空けて居眠りを始めた彼の頭上、組組には汚れた風通しにくるまされて一台のホームランドが置かれていた。そして道沿いの町で崩れた土倉を撮っていると、フーと集まってきた小学生たち。他の町では方角を向けると子供にも顔をむけられたのに、ここではそれが意外であった。その中一人は、今お金を持っているかと尋ね、それとなくとも言った。

今日と室蘭の街は煤煙に覆われているだろう。苫小牧の街は相変わらず優雅に佇んでいるのかも知れない。人々の生活にも何んの変更もなすりつて見えるかも知れない。だが昨日よりも今日も明日へと着実に押し進められていくのは、巨大な管理社会の手に彼ら一人一人が繰り込まれてしまっているのではないだろうか。現在、利権がはきりと見極めねばならない国家が、最も極端に力様木を露呈している北海道。北海道101という集団撮影に参加する。中々では人間の側から作りあげていくべき世界ビジョンをたのしみようと思っている。

個人レポート

その2

大正の初期の維新——自らを荷物に仕立て、空航しようとしたりする様に、樺太への夢が熱気にうなされたように、日本中にまんえんした時代。この所は渡航の為に賑った。まるで明治期の北海道開拓の夢を抱いて津軽の海を見たのと同じように、あの低くたれ込めた雲の色と連続したオホーツクの海を臨んだであろう。

明治以前からの体制側がこの地を北方警備の要所と固めて直轄の地点ある人間が何を求めて立つところになって来たのではあった。しかしそれはこの地の持つ性格の本質的に変わっていたのではなかった。

今ノサップ岬の先端にある米基地の白いアンテナ保護ドーム群が、みすんで背景の緑たおい込まれてゆきそう。この基地は大げさな施設は見えないが内部に持つ性格の鋭さは、他の地点は及ばない。

そこで生活する人間にとってこの侵略の拠点があるということ、生活に成り立たせることを助けるものとして考え、自らの生活を侵すものとしてとはとらえられてゆかない。ユニオン採りのおばさんは、基地の青を見て、「土地 とろれちあったべ」と言いながら、又息子も基地でアルバイトしていることをたのもしげにいう。

しかし、市内の方へ行くと市民総章がきれいな造りの家のそばに貼られ、本屋に学生録が書棚の端近くを占める。そしてバーやキャバレー等が早くも5階建てぐらいのタイル張りの中にきれいに収められ始めた。バーなんでも長屋の様に立ち並び、人間がその中で自らと対決する事を決定的に消費させてしまおうとするのである。そして街を歩く米人、又「女」達はこの街の中にあつては街角から街角へ吸い込まれていく様に見える。バー、キャバレー等はその中の動き

その中の動きが外へ溢れて来る事もない。そして若い自衛隊員が、二のような店を前にして、入る事をためらいつつ入つてしまふ。二の様に、はっきりと街自体に不透明なベールがかけられて来つつある中で、人間の中には二の動きに対して自らがはっきりと対決してゆくこと体なくなつてしまふ。「業」みたいなものを、それをやっていってしまふ。

二の漁業を漁港として盛に出したのには、北洋(樺太沖)への漁が端からである。それまでは荷物の出入れを中心に行い、漁業は漁船でのみ行われていた。そして今、二の北洋の獲物の価値は、買う側は日魯、(株)等の大企業、その傘下の企業への入札によってのみ決定されていってしまふのである。しかし、この地では不安定なボラを時々は高い収入の仕舞である。しかし、それをはっきりと企業側と譲渡した漁組の中でしかそれは存在してゆかないのである。

社文へ行く船着場の南へ行く。一番高埠頭だ。トンネルをたてに半分に割った様な半円状の防波堤が見えて来る。かつて樺太行の人間でゴった返り、漁業でゴった返り、今は廃墟のようだ。その黒い梁をさらす。先端から石の柱がガーッとおろされている。漁組が壊ったらしい建物だ、ガタガタに壊れている。ピンクやうす緑、波をよけるドームに比べると反什にすっからかんとしている。あの黒いドーム——廃墟とはいいいがたく今の何かとして、目の前に立ちすくむ。

社文へ戻る。船をおりると目の前に一部屋位の高さがあるう観光案内板がくすんだ色面をさらし立つ。冷凍工場で働くおばさん達がまぶしそうな目をして船から降りる観光客を見る。「お

の島——社文」二のキャッチフレーズのあとに大量に送り込まれて来る観光客しかし樹木の無いこの島には、あの明治後期の大小の島がなかった。+44

の老人は、「昔は家をたてるのでも何でも山から木を切りだしたもんだ。」と残念そうにいい。役場の若い職員は、「今は植林事業を全島で起=してります。数年後をみていて下さい。」と頼もしげに話す。

この島は漁業が一番就業人口の多い産業である。しかし、これも開拓期には宗谷へ入植した平民屯田兵が、僅か二冬で大半がその地を去った。しかし、その中の六人がこの島に目をつけてニニに移り、漁業を主に始める。しかし、松前藩の昔からアイヌを強制労働につかせ、漁を行ったのであった。島と外との交易は全く謂ゆるアイヌ取引であった。そして、収奪の物語を行なわれたのであった。

今ニニで取れるものはほとんど、島内で消化されてしまうのであり、島外へ送られるものは漁組を通してのみ売買取引が可能なのである。老漁夫は言う。「組合の役員なんかは工場なんかで借金をどんどん作ってしまうけれど、その借金を払うのは俺たちだ。もう二千万にもなったべ。とがでる事は若い奴のこと考えるとできぬし……、出稼ぎに東京なんかに行っても、組合から帰って来いと言われると、帰らないうけにもりかなりだべ。出稼ぎで、金かせいだ方が、ニニで漁するよりもずっともうかるんだ。

礼文の島の集落は、内地の立ち方としても似ていて、上からゴツゴツと作られたという感じではなく、人間が在りつことによつて何にか形成されていった感じがする。船泊の町から波止場の方へ行くと、ものすごくきたない冷凍工場がある。漁干場なんかは出入口がムシ口でできている。黒い建物の中で、黄色のムシばかり目立つ。工場迄は、ほろろ道路がついていけるが、ニニでばったりと途切れ、そこから家と家と

の間に踏み分けられた感じの道が続く。その右側には白く塗られた家壁が連なり、その前にはすぐ網小屋、便所、干漁場などが続く。足元にはハエナワの縄が丸く干してある。それをよけながら歩いてゆく。家の中にはテレビの青色と真白い洗剤が暗い家の中にパツと目に入る。人の気配がほとんどしなない。干漁を重ねる小屋があり、その中は臭うくらいで、ちよつと目には何をしているのか分らない。その前を歩きたか覗くとクンと二つを見える。目が合うとフツとそむけ手を動かす。船が碇の上にとどまっている。それは長く上っているらしく、それをつぎ道——以前の道と今はその人先をぐまると回って道が続く。使用してはないう船付場があり、そこをぶっんと切れ草が生えた平らな所に出る。そして、そこに白くポツンとして網小屋が立っている。

個人レポート

その3

明治二十三年旭川網走を結ぶ中央道路開きの為の囚人を収容するために造られた集治監を前身とする網走刑務所は町のはずれに山と川にはさまれている。北海道開拓の初期には鉱山の開拓や土木工事など死を伴う危険な工事の労働力として囚人ならうってつけだし、たとえ死んでも経費がそれ分だけ減って一挙両得だと言言葉のもとに多くの囚人が投入されたが明治二十四年二月工事もおおむらひで完成するという猛スピードで、使われた囚人四千のうち四百人の死者を残して完成した。囚人は開拓のための消耗品でしかなかったのである。この網走刑務所はしかし、そのきびしまれた工場と内部の壁を少しも感じさせないきれいな赤レンガの壁で身もすっぴん。余りにきれいなせいで西洋月と二つの戒を思わせる内側に観光客がタクシーで乗りつける。その塔

ハデな服装を赤レンガ壁に映えさせて笑いながら記念写真を撮る。そして観光客のルールに従って中を見ようなどと思わずタクリー女で帰っていく。きれいさの中に落しぬを感じて正門から回って山に登ろうとすると立入禁止の札とさくにつかっってしまった。我々に見せているのはあくまでもきれいなお人なのだ。そして今でもその内部に突き抜けようとする者は用意周到に準備されたサクにはさまれ、人々のあざやかさに包もうとする。そのきれいさは更にどんな意味をばらんでいるのか。網走の街を一番くれているのは看守の娘だという。あのきれいな人々に吸い込まれている看守の生活の中でその娘の心はすすんでいく。刑務所の人々は心の中を陰翳して続いている。そのキツとした美しさの中にすこさを秘めて。網走の町並全体がきれいさの中につつましやめに封じこめられている。眼をみてすぐ目に入るのは白く純粋な噴水、その前に子供連れのおばさんが白さの中に生気を吸いとられたように立っている。街の北を通る人通りもまばらな国道……両側に細い並木が続き、併のな家々がその間に木造二階の洋館風の支庁をばさんで、線の細いきさしやを感じて続いている。向うの丘の中腹には、深い緑の中に、病院の白い建物が浮んでいる。そのあまりにきれいでつましく、きさな感じが中に起っていることのあるすこさを予感させる。漁業の町網走の始めは、その幕府からその地方一帯の経済を請負っていた請負人と呼ばれる豪商の絶対的権力の下に行なわれていた。その支配の下にアイヌの解便がくり広げられたのだ。た。道内の他の地方から深い傷と最後の希望を持って人間が集ってきた二の町。最前線に立たされた囚人とアイヌ、それに続く多くの人間によって立てられた

足跡を持つことによって続いてきたその歴史は、今の二の街のたたずまりの中にどのようにつながっているのか。そこを見ようとするとは何側の姿はフノと町並みの中に吹き消されてしまう。街並のきれいさからは人間臭さは感じられぬ。人間はその心の奥までもこのきれいさそのものの中に置かれ人間の意識はそれからみだす何者も持たずにこれと同化してしまふのか。またそれは我々が認める得るべきものだろうか。

埠頭で話しかけてきた老人がいた。話しかけるとりうよりはその口調は、むしろ教えるような感じで、しきりに精神の修養が大事だというように事を繰り返す。話を聞いてみると戦後満州から引き揚げて最近までみやけもの造りをしてきたが今は飲み屋をやっている子供に喰わせてもらっているらしい。が、今自身分は働いていたりか修養を積んでいる。だからついにでかる時でも家の者はまた釣りか、なじと言わずにいねいに送りだしてくれ。惣だっただんさんつれる。都会の人間は浮かれている気遣いだ。ただ一生懸命働いてる百姓なんかは何も考えていないあほうだ。人間で一番大切なのは精神だ。それを私はあなたにお話している外でずよ。解りますか、と言ってまじんだような笑い顔をこちら側に向け。他人との具体的なかかわりの中でしか成り立たない生活が二のように他人をフツフと切っけていきながら続けられている。……埠頭は網走川の河口300m位に渡って

作られている。今は午後の3時ごろなのにビジネスマン風の男や、
おぼんてんをきたおじいさん、それに子供など30人程も岸壁に
並んでのんびりと河に釣り糸を垂れて、そしてそれをちょっとし
に感じの親子連れがながめている。目には事なるのじか^カさとし
しか映らない景色だが、こののじかさこそ深い仇を歴史に残し、現
在、人間の心の深淵をその町並の中に隠蔽したこの町にある心の
よどみではないのか。

町の歴史については語ってくれる人が今の町のこじになると語る
ものを持たなくなってしまう。皇太子が来た時建てられたという
博物館、土器から古文書からやたらに集めてはあるが説明はほと
んどない。産業室に並んでいた雪印のバター、チーズの類ばかり
お目につく。ホテルが思っようなピカピカの高校が町の中に
そびえている。ガラス張りの熱帯植物園が観光客も訪れないよう
な並木道の一角にホカッと建っている。そこに目指す方向を封じ
こめられた意識の残影が感じられる。

請負人の独占は漁協のシステムに変わり漁夫も秋田などからの定
期的出稼ぎ者によって多くを構成された経済的危機に対する安全
弁がつくられている。漁獲高の低下を切り抜け、出稼ぎ漁民は別
の土地へ流れて行く。漁民は昔のように街で派手に金を使うこと
もない。しかし、そうした近代化が進行していく中で最大の漁獲
期である秋には収益をめぐってドスを使った殺人が毎年11年ほあ

るという。人間の心のすさびは、どのような出口もなく町並のき
れいさの中で陰湿さを加えてゆく。

網走の町では腕力のあるやつよりも、スマートな頭の良いやつが
子供のボスになる。海岸の砂浜で5、6人の子供が砂の上にリン
グの四角を書いてレスリングをやっで遊んでいたが鼻をたらし
たようなものも混ざった中で足の長いすらっとしたのが皆を仕切っ
ているようだった。「危いから反則をや。ちゃダメだぞ。お前たち
はレスリングのルールを知らないんだから俺のいうことを良く聞
けよ」他のやつは足がけがをしてくるか何だかんだいいながら、そ
れに従って一生懸命組み合ひをやっている。そのスマートさ、
そのルールが網走の町を封じ込めている。丁度の中には、きりき
りきさまれでいった詰め詰は今はきれいな町並みにその姿をかくし
ている。そして出口を封じられ、屈折していく人間の傷はますます
その中に飲み込まれて行ってしまう。

北海道年表

- 1457 アイヌ民族の反乱-----コシャマインの乱
- 1542 場所持ちの圧迫に耐えかねて、瀬戸内を中心とするエゾが叛乱
- 1609 ショクシャインの乱は、日高、静内、石狩と広い地域におこりアイヌ民族自決の最後の戦いで有り。その後は見るも無残なシャモの服従をしいられた。
江戸幕府、松前藩が置かれる。
- 幕府のオ一回屯田兵
- 1868 明治 榎本武揚らが蝦夷全土を手中にする。
- 明治 五稜郭戦争により明治政府の南拓使が置かれる。
アイヌの和人同化の基本方針が明治政府よりでる。
- 明治3 網走松五郎、幌内で燃える石を発見
本願寺の坊主がアイヌの労働力を中心にして、函館-札幌間の道路を建設、「かけた日所百十三、各所に板敷をしたのが17カ所、工事にかけた期間とは正味数ヶ月」というたいへんな短い期間であった。この頃から中央政府が変ると道長官も変っていった。
- 明治5 明治政府徴兵令
- 明治8 明治政府、オ一回屯田兵ハケン。幕府側について奥羽三県が参内へ208日入植、約千人。
ロシアと千島樺太交換条約を行なう。
アイヌを旧土人に称する。
- 明治10 西南戦争に屯田兵が出兵。日頃の不満をぶつけ、最高の働きをするが、恩賞がまったく無く、怒って割腹する兵士もでた。
この頃、岩村南拓使長は「移住は貧民を生えず富民を植えん。極言すれば人民の移住を求めずして、資本の移住を求めんと欲す。」
- 明治12 幌内炭山開採

明治は 十勝地方一帯が 什工の被害。

- 15 南拓便を廢し 函館札内根室に三県を置く。
- 19 三県一府制を廢止 北海道庁を設立する 官營工場を私営に改める (サッポロビール等)
- この頃から困人をおくりこみ、用極土木工事、墾拓を行つたが、その労働は極めてきつめ(木をたおすために困人をむりやりに木の上にあて、その勢みで倒す事等々) 現在でも鉄道トンネルをほりおこすと白骨が出てくるほどである。
- 太政官大書記官 金子運太郎の言。
- 今日の如く重罪犯人の多くして、いたすらに国庫支出のかんごく費、増加するの弊、これに因徒をして、これらに必要なる仕事に服役せしめ、もしもこれに耐えずして死して、その人質を減らすのはかんごく費支出の困難を告ぐる今日において方やむをえざる政略なり。
- 金子の命令書により約千三百名の困人は当初の開拓から採鉱、土木工事へと転大されて、二きつかり行

逃走せむものは斬殺せられ、病困は斃れて墓の處す。風雨にさらされ、四十名の内、九百名が、雨者百十名がぬすか穴の間に成つていった。



- 明治2年 函館に徴兵令施行。日本海軍に丁二、三の奥の奥夫を自給?
2年 屯田兵条約完結。一 平民屯田兵を召集し初める。
2年 夕張、炭鉱で抗夫三百名が暴動。
作人等も、行李も何ひとつない。ひどいのは茶碗も
で、亭主と客との供が、行るが、それで食飯を喰つた。

7 日清戦争

毛田兵に勅命、臨時オ7師を編成(400人)
日本帝国主義はこれより侵略の道をたどる
全道に暴風雨248人死亡、救援者無
北海道全道に徴兵令
戦争景気の後、インフレとなり庶民は生活におわれ
日50銭という低賃金だった。
最後の毛田兵を召募、しかし毛田兵の定着率26%とい
う低率だったし、不逞地主がひじょうに多かった。

日露戦争

戦争による増税の苦しさは庶民の上に大きなのしかか
った夕張炭山でストライキ 約80名。
南助松、永田金蔵が活躍、後に足尾銅山争議を指揮。
内炭山暴動、足尾鉦のストライキ、暴動と続いたあ
と賃金値上げと労働条件の要求。
賃金値上げの要求には断然応ずる事能わす...又、借金外
の要求は...責任を帯びて確かにやるという事は答えか
おる。」という答えに、鉦長殺せと絶叫した120名
の鉦夫は社宅、巡視小屋をダイナマイトで破壊した。
坑夫3人が切り殺された。
夕張、幾春別、幌内、歌志内、小樽港の脱走した
等々でストライキが繰り出。

日本製鋼創立(室蘭)
王子製紙創立(苫小牧)
幸徳秋水事件おこる

明治末期には、炭鉦でガス爆発や、小樽 函館
などの大火と大災 があいついでおこっている。

夕張で2度のガス爆発、約500名が死亡
全道に大凶作 10万石から5万石にとどまり、草の根
や木の葉で食えさしのぐ生活が続く。
憲政擁護全国民大会、新政治大会が開催され東
京では2月10日に会場内で暴動が起きた年で、
大正デモクラシーの時代へと移っていく。

オ1オ世界大戦(1914) (日本中好景気であったが一部)
炭鉦が財閥の多額下 (分の1のしかはなかった。
には33と1といわれる。

輸出額大正元年の頃より10倍にふくれあがる。
大戦中、景気の波に乗った成金がでる。リンゴ成金、
成金。

大正6

日本製鉦ストライキ、兵器づくりを放棄

7 申道50年祭が全道の大騒動をよそに、はなやかに開かれ。
8 オ一オの大戦後不景気は諸物価の高騰を背景として、石炭
積込み人夫(室蘭) 日本電気工業 3000人(苫小牧) 糖業人夫
(小樽) 函館ドックの鉦工150人等いたるところで労働争
議。

9 神楽村小作争議

夕張、歌志内等でガス爆発500人死亡
小作争議 雨龍村、中津須賀農場で小作人、農場側の
一方的な納税に不満が爆発→昭和まで6回
切り代→全道炭鉦、小樽の豆炭工場などで4万14人
が失業。

10 日本製鉦はオ一オに4000人の首きり
函館と苫小牧で大火、両方で2100戸を焼失

凶作

11 有島武郎は農地解放宣言→小作人はおれおれ欲にはり
失敗、12年有島武郎は波多野秋ると心中。
共産党成立

12 関東大震災

14 小樽高商事件→軍教反対運動

15 農業恐慌

旭川、系屋銀行が倒産

昭和 全道で最初のクーデター —— スローガン (首きり反対
労働者保護法)

2 金融恐慌、昭和ひとけた不況時代に入

小樽港労働者——ストライキ 小樽多喜
労働者の不利は妥協でおわる

3 共産党の一斉撲滅、小樽、函館で700名。

4 凶作で労働争議、小作争議が続発

5 世界大恐慌

6 全道的大恐慌

昭和5年 301万3000石

6年 144万9000石

飢饉地獄の有様 南瓜はまじり方と澱粉粥等を主食と
して食えさしのがでいる

道庁側官は口でいっても、いり放しの働きはなしだった。

昭和1年までの凶作まで身売りは300人に達する

昭和1年には失業2千人に達する

小作争議が156件も起る

日本軍陸軍、奉天郊外柳条溝で炭鉦が暴発、オ一オ全
道に流行、15年戦争。世相的には、エロクロナンセンスが流行

- 昭和17 また凶作(前年に軒をかけるというものの、大雪と重なった)
オリンピック3段とびの南部選手が金メダル
昭和6、7年にあたり米よこせ運動が全国的に広が
り続けた。
- 8 小林多喜二殺される
全道的にデフレ (14数)
恐慌 昭和34-100
凶作 54 68
- | 昭和 | 米産(石)思想検挙 |
|------|-----------|
| 昭和15 | 300人 |
| 昭和16 | 144 173人 |
| 昭和17 | 76 185人 |
| 昭和18 | |
| 昭和19 | |
| 昭和20 | |
- 9 満州で戦争が拡大し 日本製鋼などが日鋼に参加、戦争
旅行に大きな役割
- 10 道内の警察 改正
警察国家への生かため
- 11 道内大演習会(天皇)くる)
- 満州へ南は義勇軍を派遣、前昭和青年義勇軍222、小滝
その後北海道は戦争への協力体制に突入する
戦中は本土決戦へ本可欠食料戦士として直接戦力に入
れる戦後と違い、食料と国土再建とを両手に担い、戦
災者北海道に送り込 だ→昭和と田舎
しかしその形態は悲 しみわめ、着のみのままなり、かけ
た人間は、建っているはずの家もなく、土はあっても、よ
た原野であり激しい寒波の中で奮闘農していた人間がい
らいたろうか。
- 朝鮮戦争の経済成長の中で北海道は何年計画を元
定するのか。土地気候のため赤字覚悟でやらなければ
ならない。
- 31 大凶作 脱落者、離農者、困窮者が町内民の中から出る
農産物の集産地には身売防止相談所が設けられた
- 39 1964年(8.39)から3年間またしても農民は冷害をうける
加えて、海外農産輸入の影響をうけて窮迫する。
25万戸→18万戸
。昭和36年代には炭鉱落盤事故があいつぎ 200名
位の単位で死んでゆく、

昭和43 北海道百年祭、100万人以上集めた。道内各地からバスを運
らねてやってくる。

「風雪百年、輝く未来」

44 歌志内で12人落盤事故で死亡

47 サッポロで冬季オリンピック開催予定

カンパの呼びかけ

'69の中で我々の集田的課題としての北海道
101の行動が現実の側にはっきりとしたものを定着さ
せる事を旨とし、'68広島デーから'69101の写真の
課題、この行動によって連盟活動を全国的にまきお
こす また北海道に文化の芽をおこすことをはっきりとやり
きらねはならない。

この101の行動は撮影に参加する人間にとってミ
けの課題ではなく、生この人間にとっての課題として我
々の中に持たねばならない。この事をやりきるためには
撮影から出版に至る迄、はっきりと1人1人が荷なわなけ
ればならない。この事をやりきるためには莫大な金を
必要とする。これを金という外在的なことでとまらせることは
できない。

一人一人がこの活動を支援し、**カンパ**を要請します。

北海道101集田撮影